

昨

年の秋、チタン国際会議でシカゴに向かう機内で映画『リンカーン』を見た。奴隷解放に命を懸けた第16代アメリカ大統領エイブラハム・リンカーンのその執念を政治ドラマに作り込んだ、ステイブン・スピルバーグ監督の力作だが、途中で寝てしまい、結局3回も見ると目になった。奴隷制廃止を下院に通すまでのリンカーン大統領の苦悩と決断のストーリーは理解できるが、何か釈然としないのである。

レアメタルの仕事では資源国家が中心になるので、アメリカよりも発展途上国を訪問することが圧倒的に多い。ところが、最近の動向を見ていると資源の世界にも大きな変化が起こっている。過去10年間続いた資源ブームも今は鳴りを潜め、逆に資源安シヨックが世界経済を揺さぶっている。

資源安シヨックの原因は、アメリカのシェールオイル・ガスの開発によるエネルギー革命である。今やアメリカは資源大国の道を歩み出し、中東に頼る必要がなくなりつつある。チタン会議には、千数百人のチタン関係者が世界中から集まった。

基調講演では各国の代表による比較的楽観的な市場環境の発表があり、アメリカ経済の好景気を煽るような雰囲気は初日はスタートした。その後、ボーイングやエアバスなどの航空機産業をはじめ、化学

産業用途の需要家からチタンの加工メーカー、原料メーカーによる2015年度に向けた契約交渉がはじまった。

ところが、具体的な交渉に入ると各国の需要家の見方は、足元の在庫整理が翌年度までずれ込むとの予想が多く、2015年度はまだ不透明であるとの意見が大勢を占めた。エネルギーコストが下がれば、ほぼ全てのコモディティに先安観が出てくるのは当然だ。

エネルギー需給の勢力図が変われば鉄鉱石や非鉄、レアメタルに至るまで影響を受けるのは自明の理である。2013年からは完全に世界の資源の潮目が変わり、明らかに資源安に向かっているのをしばらく止めることはできないだろう。

交錯する資源国の思惑

チタン会議も終わり、帰国便で4回目の映画『リンカーン』を見て気がついたことがある。南北戦争、リンカーン大統領の暗殺など多くの血を代償にして民主主義は達成された。だが、その民主主義をアメリカが中東などに輸出しようとするほど、国際的な紛争の火に油を注いでいるようにも見える。民主主義



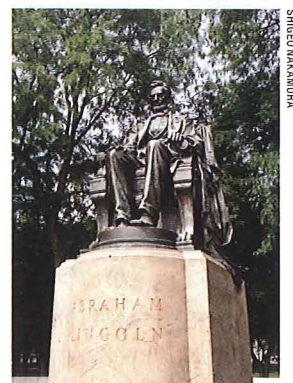
AROUND THE WORLD

山師の手帳

中村繁夫 Shigeo Nakamura

第38回 肉を切らせて骨を断つ 資源覇権を狙うアメリカ

写真・生津勝隆 Masataka Namazu



シカゴ・ Grant Park内のリンカーン像。リンカーンは政治家としてのキャリアをイリノイ州ではじめた

義という理想と、今の現実との乖離が『リンカーン』を見て釈然としない理由なのかもしれない。

世界の現実を見れば、民主主義どころか、いまだに大国による覇権争いである。中間

選挙では民主党が大敗してオバマ大統領の人氣は下降の一途であるが、アメリカの世界戦略は、資源大国として復活することである。

掘削コストの高いシェールも原油価格が下がれば生産に悪影響が出るものの、ロシアやベネズエラなど原油頼みの国のほうがもっと苦しい。実際、ルーブルは暴落し、ベネズエラはデフォルトするのではないかと懸念も出はじめている。いわば「肉を切らせて骨を断つ」戦略でロシアなど反米の資源大国に宣戦布告するような動きを見せている。

一方、シェールによる原油相場の低迷に過剰反応したOPECのリーダーであるサウジアラビアもOPECの生産調整をしないことにした。これは、逆にアメリカのシェールを潰すためである。シェールもサウジの原油には敵わない。サウジはアメリカに宣戦布告したのだ。2015年の資源安シヨックはまだ収まる気配はない。

なかむら・しげお レアメタル専門商社、アドバンストマテリアルジャパン(AMJ)社長、日本におけるレアメタルの第一人者、世界100カ国を訪問し、世界制覇を目指す。